HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	関西方言における「へん否定」について
著者	上野，誠治
引用	北海学園大学人文論集，23・24：35-52
発行日	2003-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

関西方言における「へん否定」について*

上　野　誠　治

0．はじめに

標準語における否定表現として，動詞＋助動詞「ない」という一般的な形式が存在するが，その他に，関西方言では，動詞＋助動詞「へん」の形式が広く用いられている。金田一ほか（1981）『日本国語大辞典（縮刷版）』には，以下のような例が挙げられている[1]。

(1)　a．ア段に変化したものに付く
　　例　行かへん，有らへん
　　b．エ段に変化したものに付く
　　例　行けへん，有れへん，為（せえ）へん
　　c．イ段の長音に変化したものに付く
　　例　着（きい）へん，来（きい）へん，見（みい）へん

ここで注目されるのは，「行く」という五段活用動詞の否定形が「行かへん」「行けへん」と2種類あることである。「有る」についても同様である。標準語での動詞「行く」は，その未然形に助動詞「ない」がついて，「行か

---

*　本研究は平成14年度北海学園大学学術研究助成金（共同研究）「欧米文化の諸相―異文化理解と日本の課題」から一部援助を受けている。

(1)「為（せえ）へん」「来（きい）へん」「見（みい）へん」などの表記は，2節以降では，参考にした文献の表記を踏襲して「せーへん」「きーへん」「みーへん」のように長音記号を使って表すことがある。

ない」となる。したがって，もし関西方言に見られる助動詞「へん」が標準語の助動詞「ない」と単純に対応し置換可能であるとすれば，「行けへん」の形は何に由来するのであろうか。同辞典によれば，「行きはせぬ（ん）」「行きゃせん」が「行きゃへん」となり，明治時代に「行かへん」になった。「行けへん」は，それがさらに変化したもので，前者は京都での使用頻度が高く，後者は大阪で高いという。1節では，「行きはせぬ(ん)」「行きゃせん」→「行きゃへん」→「行かへん」→「行けへん」という一連の変化について，単に「ことばが変化した」と述べるのではなく，そこにいかなる言語現象が潜在しているのかを考察する。

次に，「来る」の否定に関しては，「来（きい）へん」の他に「来（けえ）へん」や「来（きい）ひん」などの形が見られる。2節では，これらの表現がどのような音韻変化を経て発生したのかを考察する。その際，「へん」から「ひん」への変化は，ウムラウトではなく進行同化(progressive assimilation)によるものであることを指摘する。また，「来（こー）へん」という言い方について，その発生の背後にある人間の心理なども考察してみたい。

最後に，3節では，動詞の活用と否定の助動詞「へん」の接続の仕方について考察する。「へん」はもともと「～はせぬ」という表現の中の「せぬ」が「せん」を経て「へん」になったものであるが，現代では「へん」それ自体が一つの助動詞としての資格を持つと認知されるようになっていると思われる。標準語の否定の助動詞「ない」と同様，「へん」が動詞の未然形に接続して否定表現を作ると仮定すれば，動詞の活用の仕方が標準語と関西方言では違ってくる可能性がある。しかし，それはすべての種類の動詞に関してではなく，カ行変格活用動詞「来る」の場合にだけであることを論じる。

1．「へん」の由来と「行く」の否定形

現代では，関西方言の助動詞「へん」は標準語の助動詞「ない」に単純に対応する表現と思われるかもしれないが，言語現象はそれほど簡単では

ない。そこで，本節では「へん」の由来について，まず再確認しておくことにする。

もともと関西方言，特に京都弁では，例えば，「行く」の否定は，「行かん」であったように，動詞の未然形＋「ん」という形が一般的であった。加えて，「行きはせぬ」と強調した言い方が生まれ，そこから「へん」が登場したと考えられている（平山 1997 b 参照）。

前節でも述べたように，「へん」はもともと「～はせぬ（ん）」の一部である「せぬ（ん）」から次のようにして派生してきた表現である。

(2) せぬ → せん → へん
senu　sen　hen

変化自体は簡単であるが，詳しく見ていくと，senu → sen への変化は母音 u の語末音脱落（apocope）によるものである。語末音脱落は，音脱落の一種であるが，例えば，次のような例に見られる現象である[(2)]。

(3) やっぱり，やっぱし → やっぱ
yappa<u>ri</u>　yappa<u>si</u>　yappa
しらぬ → しらん
siran<u>u</u>　siran

(4) going → goin'
coming → comin'

また，sen → hen への変化は s → h という「サ行子音の弱化」によるものである（真田 2000 b）。このサ行音とハ行音の子音交替は関西方言では，よ

---

(2) ローマ字表記は，訓令式ローマ字を用いる。注 3 参照。

く見られる特徴である。たとえば，次のような例がある。いずれも，ローマ字表記してみるとよくわかるが，s→hへの弱化が起こっている（平山1997b，真田2000b参照)。

(5)　おばさん → おばはん，すみません → すんまへん
　　しつこい → ひつこい[3]
　　それじゃ → ほな，ほんなら，ほんだら

(6)　なさる → なはる，それで → ほれで
　　しましょ → しまひょ

(7)　田中さん → 田中はん
　　番頭さん → 番頭はん[4]

以上の事実をふまえると，「せん」が「へん」に変化した現象は，決して単一偶発的な変化なのではなく，語末音脱落とサ行子音の弱化を経た，十分に根拠のある変化であることがわかる。

次に，標準語「行かない」に対応する関西方言「行かへん」について考察する。関西方言では，「行く」の否定の言い方として，もともと「行かん」があったが，これは動詞の「行く」にいわゆる打ち消しの助動詞「ぬ」がついて「行かぬ」となり，その後，語末音のuが脱落して「行かん」となっ

---

(3)　「しつこい」「ひつこい」はヘボン式ローマ字で表記するとそれぞれshitsukoi，hitsukoiとなり，一見sh→hの変化に見える。しかし，日本語では，shが表す音の[ʃ]は音素/s/の異音である。したがって，「しつこい」は音素表示すると/situkoi/となる。通常，音素は/　/に入れて表されるが，本稿では便宜上，簡略化して表記することにする。

(4)　ただし，イ段・ウ段につくときは，「はん」とはならない（堀井1999参照)。例えば，「山本はん」「寿実子はん」は「はん」になるが，「堀井さん」「大津さん」は「さん」となる。

たものである[5]。それに対して，「行かへん」という言い方は，「行きはせぬ」から生まれたもので，おおよそ次のような変遷をたどったと考えられている。しかし，これには2説あるようで，(8)は金田一ほか(1981)，尾上(1999)の考え方を，また(9)は真田（2000 b，2001）のものを図示したものである。「行きやせん」の中の「きや」が拗音である「きゃ」に変化したあと「せん」→「へん」の変化が起こったと考えるか，あるいは先にs→hの変化が起こったあとに「きや」→「きゃ」となったと考えるかの違いである。

(8) 行きはせぬ → 行きはせん → 行きやせん → 行きゃせん →
行きゃへん → 行かへん

(9) 行きはせぬ → 行きはせん → 行きやせん → 行きやへん →
行きゃへん → 行かへん

なお，日本語では，平安末期の11世紀初め頃から語中・語尾のハ行音がワ行音で発音されるという変化が生じた(小泉1995，坂梨・月本2001参照)。

(10) ハ行音　ハ[Φa]　ヒ[Φi]　フ[Φu]　ヘ[Φe]　ホ[Φo]
↓
ワ行音　ワ[wa]　ヰ[wi]　ウ[wu]　ヱ[we]　ヲ[wo]

このようにハ行からワ行で発音されるようになった音は，「ハ行転呼音」と言われるが，現代日本語の助詞「は」「へ」「を」もこの転呼音である。したがって，元禄期に発生した「行きはせぬ」は，当時，すでに「イキワ

---

(5) 真田（2000 b）によれば，元禄期では「行かぬ」が代表的な形で，「ぬ」が「ん」に変わった「行かん」という形が登場するのは文化文政期である。また一方で，元禄期には「行かぬ」を少し強調した「行きはせぬ」という言い方も生まれたらしい。

セヌ」と発音されていたと思われる（注5参照)。

(8), (9)の最後に示されている「行かへん」の他に，特に大阪近辺で使用される「行けへん」について，尾上（1999）は，「行きゃへん」のiki(y)aがikeに変わって「行けへん」となったと説明している。その根拠は，i(y)aの音がeの音に変わるのはわりあい自然のことだと述べ，その例として「しやせん」→「せえへん」の変化をあげている。これを図示すると，次の(11)のようになる。また，真田(2000b)は，(12)のように述べているが，考え方はほぼ同じでろう。

(11)　……→行きゃへん→行かへん
　　　　　　　　　　→行けへん

(12)　……→行きやへん→行きゃへん→行かへん
　　　　　　　　　　→行きえへん→行けへん

いずれにしても，「行かへん」と「行けへん」はともに，「行きはしない」という意味の「行きゃへん」から生まれた言い方であるから，当然意味は同じである[6]。しかし，実際は，前者は京都を中心に，後者は大阪を中心に使用されている言い方である。

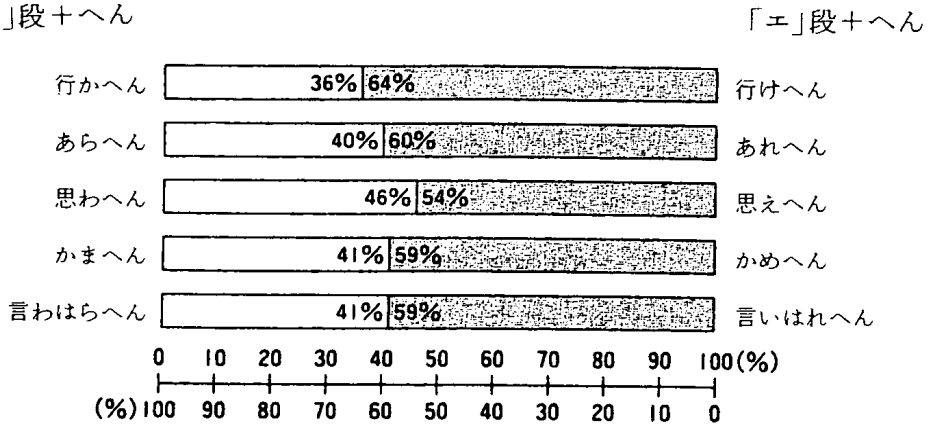
このように，否定の助動詞「へん」をつけて表現する場合，同じ動詞のア段につく場合（例えば，行かへん，有らへん，思わへん）と，エ段につく場合(例えば，行けへん，有れへん，思えへん)の2種類がある。彭飛(ポン・フェイ)(1999）によると，どちらを使うかは，年齢差，性差とはあまり関係なく，京都と大阪といった地域差によることが調査結果として示されている。そ

---

[6]　京都では，「行かない」を「行かへん」，「行けない」を「行けへん」のように役割分担させている。一方，大阪では，ともに「行かない」の意味になってしまうので，「行けない」を普通「行かれへん」と言って区別する(平山1997b参照)。

れによると，(13)から明らかなように，大阪では，エ段＋「へん」の使用頻度の方が高いことがわかる。

(13) 「へん」の接続する動詞の形（ア段とエ段）



（彭飛 1999 から転載）

(11)，(12)に示した尾上(1999)，真田(2000 b)に対して，金田一ほか(1988)は，大阪周辺で見られる「行けへん」というエ段＋「へん」の言い方は，「行かへん」の形から，逆行同化（regressive assimilation）によって，すなわち，「か」（ka）の母音が後続の「へ」（he）の母音に影響され，「行けへん」という言い方が生じたと述べている。これを図示すると，次のようになるであろう。

(14) …… → 行かへん → 行けへん

尾上（1999），真田（2000 b）に示されるように，「きゃ」あるいは「きや」から「け」が生じたのか，それとも金田一ほか（1988）に示されるように逆行同化によって生じたのか，という問題について，次に若干考察してみたい。

関西方言には，尊敬または丁寧の意を示す助動詞に「はる」がある（例えば，書かはる，読まはる）が，それはもともと「なさる」という言い方から，「サ行子音の弱化」によって，「なはる」が生じ，さらに語頭の「な」が「や」に変化して「やはる」になったり，あるいは脱落して「はる」と

なったものである（堀井1999参照）[7]。例として，「行く」の場合の「行かはる」という言い方が生まれた経緯を以下に示す。

(15) 行きなさる → 行きなはる → 行きやはる →
行きゃはる → 行かはる

この「行かはる」は京都の言い方で，「行かへん」と同様，ア段に「はる」がついた言い方になっている。もし，「行きやはる」「行きゃはる」の「きや」「きゃ」から，否定の場合と同様，「け」が生じるとすれば，「行けはる」という言い方が予測されるが，そのような言い方は実際には存在しない。大阪での言い方は，「行けはる」ではなく「行きはる」である。したがって，尾上（1999），真田（2000 b）の説は，否定の場合はともかく，少なくとも，この尊敬の助動詞「はる」に関しては当てはまらないことがわかる。

では，大阪周辺で使用される「行きはる」はどのようにして生じたものであろうか。まず，金田一ほか（1988）が否定に関して述べたような逆行同化をこの場合にも想定するということは不可能であると思われる。なぜなら，「行かはる」の「か」（ka）と「は」（ha）はともに同じ母音 a を持つからである。考えられるのは，むしろ，この場合は逆行異化（regressive dissimilation）かもしれない。

異化は，同化とは反対に，ある音が隣接または近接する音の影響を受けて違った性質を持つ音に変化する現象のことである。逆行異化の例としては，ラテン語の peregrīnus（巡礼）からイタリア語 pellegrino への変化があげられる。中英語時代に見られる pilegrim，pelegrim も同様である。この場合，2つの r 音の同じ調音運動を避けるために，異化作用によって，前の r 音が l 音に変化している。「行かはる」の場合も同様で，ikaharu において a 音という母音の重複を避けるために，前の a 音がたまたま i 音に変

---

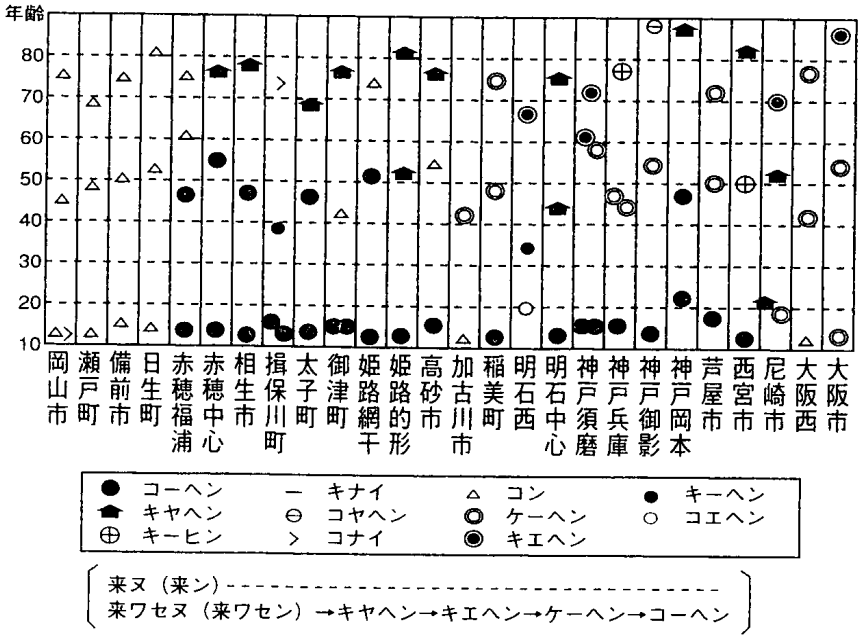
(7) これも音脱落の一種で，語頭音脱落（aphaeresis）と呼ばれる現象である。

化したのであろう。日本語の「七日」は，もともとnanakaであるが，2つ目の母音aがu音またはo音に変化してnanuka, nanokaと発音されるようになった現象と軌を一にしていると思われる。

2．「来る」の否定形

ここでは，関西方言における「来る」の否定の言い方を考察する。「行く」の場合と同様，もともとは「来（こ）ぬ（ん）」という言い方があったが，それに加えて，「来（き）はしない」という強調形から生まれた「来（きい）へん」という言い方もあり，さらに大阪・神戸の若い世代は「来（けー）へん」「来（こー）へん」とも言うようになってきている（井上1998参照）。真田（2000b）には「来（きい）へん」については，特に説明はないが[8]，このような言い方の歴史的な変遷については次の図の下に示されている。

(16) 「来ない」の表現形



（真田2000bから転載）

---

[8] ただし，(16)の中には，「来（きい）へん」に対応すると思われる「キーヘン」の存在そのものは示されている。

その中に，「来（きい）へん」を加えるとすれば，恐らく次のようになるであろう。

(17) 来はせぬ → 来はせん → 来やへん → 来（きい）へん →
来（きえ）へん → 来（けえ）へん → 来（けー）へん →
来（こー）へん

「来（きい）へん」から「来（けえ）へん」「来（けー）へん」への変化は，もともと「来る」の連用形「き」に「〜はせぬ（ん）」がついたものであるから，「来（きい）へん」の方が古い形であろう。それが，逆行同化の作用によって，「へん」(hen) の母音の影響を受けて，「来（きい）」(kii) が「来（きえ）」(kie)，さらには「来（けー）」(kee) へと変化したものと考えられる[9]。ついでに言えば，大阪では，「へん」がエ段につく傾向があったことも，この逆行同化を促進する作用を及ぼしたかもしれない。

(16)や(17)の最後に登場する「来（こー）へん」については注意する必要がある。「来る」というカ行変格活用動詞は，標準語では，「こ・き・くる・くる・くれ・こい（こよ）」と活用し，否定表現を作るときは，この未然形「こ」に助動詞「ない」をつけて，「来ない」という言い方をする。もし，関西方言でも同じことが言えるとしたら，「こ」+「へん」から「こーへん」という言い方になるのはきわめて自然であるように思われる。しかし，真田（2000 b，2001）によれば，「来（こー）へん」は「こ」+「へん」から発生したものではなく，もともとの「来（けー）へん」という方言形が標準語の「来（こ）ない」という言い方から干渉を受けて生まれた「ネオ方言」である。真田（2000 b）によると，「来（こー）へん」は大阪ではまだ比較

---

(9) 関西方言，特に大阪弁では，連母音 [ie] が [e:] に融合する傾向がある（平山 1997 b 参照）。例えば，「見えた」は「メータ」，「消える」は「ケータ」となる。この傾向が，「来（けー）へん」への変化を背後で支えていると思われる。

的使用頻度は高くないが，神戸以西の若年層で使用頻度が高くなっている。これは，大阪では，エ段に「へん」がつくというパターン，すなわち文法規則が，ある程度確立しているためかもしれない。したがって，「来(こー)へん」が見られる地域は，標準語の影響を受けやすい新興住宅地ということになる。

また，井上（1998）が述べるように，その背景には活用体系をそろえるという類推作用も働いているかもしれない。別の言い方をすれば，下の⒅において，「偶然の空白（accidental gap）」を埋めるために[10]，「来（こー）へん」という表現が考え出された可能性がある。

⒅　a．（五段）　書かせる，書かれる，書かへん
　　b．（下二段）　受けさせる，受けられる，受けへん
　　c．（カ変）　来させる，来られる，来（こー）へん

⒅にあげた3つの動詞の対比からわかるように，「書く」「受ける」などの多くの動詞は，「（さ）せる」「（ら）れる」に接続するときは，未然形をとる。このパターンの類推から，「来（こー）へん」という言い方になるとする説明には合点がいく。歴史的な変遷はともかく，今では，「へん」が否定の助動詞として確立してしまっているので，関西の若者の多くは，このようなとらえ方をしているかもしれない。

次に，「来（きー）ひん」という言い方について検討する。⒃では，神戸近辺に分布する言い方のように思われるが，実際は，京都を中心に広く近畿圏一帯の，特に若年層で使用されているようである。この言い方は，「来（きー）へん」の前半部の「来（きー）」における母音iが後半部の「へん」における母音eに影響を与え，e→iへと変化したものと考えられる。これも同化作用によるものであるが，前の音が後続の音に影響を与えているの

---

(10)　Chomsky（1965）などの用語。

で，進行同化に該当する。

「見る」という動詞についても同様で，もともと「見はせぬ（ん）」から生まれた「見（みえ）へん」が変化して「見（めー）へん」となった言い方がある一方で（注9参照），「見（みえ）へん」が「見（みー）へん」となり，ここで進行同化の作用を受けて，「見（みー）ひん」が発生したと考えられる[11]。それを図示すると，次のようになる。

(19)　見はせぬ → 見はせん → 見やせん → 見やへん →
見（みえ）へん → 見（めー）へん
↘ 見（みー）へん → 見（みー）ひん

なお，神山（1995）は，この「見（みー）へん」から「見（みー）ひん」への変化をウムラウト（Umlaut）と見なしている。一般に，ウムラウトや口蓋化（palatalization）は同化という用語でまとめられる変化であるが（風間1993参照），この場合の変化をウムラウトとみなすことには若干問題があると思われる。そこで，まず手始めとして，通常，ウムラウトがどのように定義されているかを確認したいと思う。以下，太字は筆者による。

(20)　ゴート語を除くすべてのゲルマン語に見られる，強勢のある音節の母音が，**後続の**音節の母音によって同化（ASSIMILATION）される現象のこと。（田中ほか1988）

(21)　先行する母音（VOWEL）に対する，**後続**母音が及ぼす同化（ASSIMILATION）作用［この場合は逆行同化］として特徴づけられる音韻過程，音韻変化をいう。（荒木・安井1992）

---

(11)　あるいは，3節で述べるように，下二段活用動詞「見る」の未然形「み」が長音化した「みー」に「へん」がついて「みーへん」になった，と共時的に記述する可能性もあるかもしれない。

(22) German term for an (anticipated, partial) assimilation of the vowel of the syllable with main stress to the vowel of the **following** (secondary stressed or unstressed) syllable.
(Bussmann 1996，一部省略)[12]

(23) Any of various types of anticipatory vowel assimilation occurring in the Germanic languages. The general pattern is this: a vowel (short or long) undergoes partial assimilation (fronting, backing, lowering or rounding) to a vowel or a glide in the **following** syllable.
(Trask 2000)[13]

以上の定義からわかるように，ウムラウトは「後続の母音が先行する母音を同化する現象」である。(23)は，「一般的なパターンは」と断っているので，それ以外の可能性の含みもあるかもしれないが，通常，ウムラウトというのは逆行同化の現象である。「見（みー）ひん」の場合は，進行同化であるから，ウムラウトと呼ぶことにはいささか問題があるのではないかと思われる。

なお，「来（きー）ひん」「見（みー）ひん」や「する」の否定形「しーひん」は若年層で優勢になりつつある表現である[14]。つまり，進行同化の結果「へん否定」から変化した「ひん否定」は新しい表現であると思われる。これとは別に，郡部の特に高年層では例えば，「行かひん」や「行かし

---

(12) 原文では，assimilation，vowel，vowel harmony が太字になっているが，筆者による太字表記と混乱を避けるため，引用では割愛した。

(13) 注 12 と同様に，原文では，assimilation，fronting，backing，lowering，rounding が太字になっている。

(14) 「しはせぬ（ん）」が変化して，「しーへん」となり，さらに進行同化の作用で「しーひん」になったと考えられる。

ん」などの「ひん」「しん」をもちいた否定の言い方があるが，「行かひん」は「行かへん」から進行同化によって変化したとは考えられないので，「来（きー）ひん」「見（みー）ひん」などとは区別しておく必要があると思われる。

3．動詞の活用と「へん」の接続

例えば，標準語の五段活用動詞「書く」は「か・き・く・く・け・け」と活用し，否定表現を作るときは，その未然形である「書か」に助動詞「ない」をつける。関西方言においても同様に，未然形に「へん」がつくと仮定すれば，大阪弁の「書く」は「け・き・く・く・け・け」のように活用し，未然形の「書け」に「へん」がついて，「書けへん」になると記述することは可能かもしれない。一方，京都弁の「書く」の活用は標準語と同じで「か・き・く・く・け・け」であり，その否定形は「書かへん」となる。しかし，その場合，大阪弁と京都弁で別個の活用を前提としなくてはならなくなる。もし，「書けへん」が「書かへん」から逆行同化によって派生した，という考え方が正しければ，別個の活用を設定する必要はないことになる。「音韻的な内的変化」（真田2000b参照）として説明することが可能だからである。したがって，関西方言における「書く」などの五段活用動詞の活用の仕方は標準語と同じであり，その否定形は未然形の「書く」に「へん」がついて「書かへん」となり，それが京都を中心に用いられている。その「書かへん」が大阪では，逆行同化の作用やエ段＋「へん」が好まれる傾向があるために，「書けへん」が使われるようになったと考えるべきである[15]。

上一段活用動詞や下二段活用動詞は，いずれも未然形と連用形が同じに

---

(15)　ついでに言えば，「書けへん」は「書く」の仮定形「書け」に「へん」が接続したものでは，決してない。

なる。例えば，「見る」は「み・み・みる・みる・みれ・みよ（みろ）」，一方，「出る」は「で・で・でる・でる・でれ・でよ（でろ）」のように活用する。この場合，否定の助動詞「へん」は未然形につくとして構わないだろう。「見る」の否定形は，「見（みー）へん」となる。この他に，「見（めー）へん」「見（みー）ひん」という言い方もあるが，前者は，「へん」の母音eが先行する「見（みー）」の母音iに影響し，逆行同化の作用で「見（めー）へん」に変化したと説明できる。また，後者の「見（みー）ひん」は，逆に，「見（みー）」の母音iが後続する「へん」の母音eに影響を与え，進行同化の作用で変化したものであろう。なお，「出る」の否定形は，「で」が長音化した「でー」に「へん」がついた「出（でー）へん」である。この場合，「出（でー）」の母音も「へん」の母音もともに同じe音なので，同化作用は起こり得ない。したがって，「出（でー）へん」という形しかないことが説明される。

サ行変格活用動詞「する」の場合は，「せ（し）・し・する・する・すれ・せよ（しろ）」と活用し，標準語では未然形の「し」に助動詞「ない」がついて，「しない」となる。関西方言の場合も同様に考えて，「し」の長音化した「しー」に助動詞「へん」がついて，「しーへん」となると考えられる。「せーへん」に関しては，未然形の「せ」が長音化した「せー」に「へん」がついた言い方であると述べることも可能かもしれないが，標準語では「せ」は否定の助動詞「ず」につく形である。したがって，ここでは，「しーへん」が基本形で，逆行同化の作用により，「せーへん」へ変化したものと考えたい。

最後に，カ行変格動詞「来る」の場合であるが，他の種類の動詞とは異なり，事情はもっと複雑である。活用の仕方は，「こ・き・くる・くる・くれ・こい（こよ）」となり，標準語の否定形は「来ない」であるが，関西方言における否定の言い方には，「来（きー）へん」「来（きー）ひん」「来（けー）へん」「来（こー）へん」などがある。

「来（きー）へん」「来（きー）ひん」は，連用形の「き」が長音化した「きー」に「へん」がついたもので，「来（きー）ひん」は進行同化の作用

で，「へん」が「ひん」に変化したものかもしれない。また，「来（けー）へん」は，「来（きー）へん」から逆行同化の作用で，変化したものと説明できるかもしれない。しかし，この説明では，「来（きー）へん」から「来（きー）ひん」または「来（けー）へん」への変化についてはともかく，カ行変格活用動詞「来る」の場合に限って，未然形ではなく連用形に「へん」がつくと規定しなければならず，文法記述の統一性をなくしてしまうように思われる。

一方，「来（こー）へん」は，「見る」「出る」「する」などの場合と同様に，未然形の「こ」が長音化した「こー」に「へん」がついたものと考えることは可能である。「来（こー）へん」というネオ方言が出現した背景には，(18)でも述べたように活用体系をそろえ，文法に統一性を与えようとする心理があったものと思われる。もし，「来（こー）へん」が本来の形であれば，何らかの音韻変化を経た結果，「来（きー）へん」などの言い方が発生したと説明することも可能であろうが，「来（こー）へん」がネオ方言であり，本来の形ではない以上，この説明には無理がある。したがって，今のところ，文法記述の統一性，すなわち，動詞の未然形＋「へん」のパターンを堅持するためには，関西方言における「来る」の未然形として「き」を追加するより他にないと思われる(16)。

4．まとめ

本稿では，関西方言に見られる「へん否定」について詳しく考察したが，「へん」は現代では，否定の助動詞として確立した感があるが，音脱落，同化，異化などの一般的な言語作用の結果生じたものであることを確認した。

---

(16) 「来る」の否定表現として「来（き）ない」を持つ方言が群馬県や埼玉県にあるが，これらの方言においても，「来る」の未然形に「き」を設定することが可能かもしれない。もしそうであれば，「来る」の未然形として「き」を追加することは関西方言に限った現象ではなくなるだろう。

また，同じ否定でも，大阪と京都では異なる言い方が見られる。例えば，「行けへん」と「行かへん」などである。これは，「へん」の接続の仕方が，地域によって異なる例であるが，決して別々の独立した表現ではないことがわかった。すなわち，「行けへん」は「行かへん」から逆行同化の作用によって発生したものである。

また，動詞の活用と否定の関係を考えた場合，関西方言においても，基本的には動詞の未然形に否定の助動詞「へん」がつく，という文法を想定することができると思われる。ただし，カ行変格活用動詞「来る」に関しては，それを適用することが困難なので，代案として，関西方言の「来る」の未然形に「き」を追加することを提案した。

なお，本稿で取り上げた言い方の他にも様々な否定形があり，例えば郡部の高年層に見られる「行かひん」などは，ある時期にある条件の下で「へん」が「ひん」へ変化し[17]，それが特定の集団内で，否定の助動詞としての地位を固めた結果，「行く」の未然形に接続されて「行かひん」になったのではないかと考えられるが，データが少ないので明確なことはまだ言えない。今後の研究課題としたい。

参考文献

荒木一雄，安井　稔（編）（1992）『現代英文法辞典』三省堂.

Bussmann, Hadumod (1996) *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. (Translated and edited by Gregory Trauth and Kerstin Kazzazi) Routledge.

Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.

古田東朔（1994）『改訂版　日本語学概論』（放送大学教材）財団法人　放送大学教育振興会.

---

[17] おそらく，「へん」から「ひん」へと進行同化を促すような環境が古い時代にあったと推定される。

平山輝男（編）(1997 a)『京都府のことば』(日本のことばシリーズ 26) 明治書院.

平山輝男（編）(1997 b)『大阪府のことば』(日本のことばシリーズ 27) 明治書院.

井上史雄（1998)『日本語ウォッチング』岩波新書.

猪塚　元，猪塚恵美子（1995)『日本語の音声入門　解説と演習』新装版.（日本語教師トレーニングマニュアル１）バベル・プレス.

堀井令以知（編）(1999)『上方ことば語源辞典』東京堂出版.

風間喜代三（1993)『言語学』東京大学出版会.

神山孝夫（1995)『日欧比較音声学入門』鳳書房.

金田一春彦ほか（編）(1988)『日本語百科大事典（縮刷版)』大修館書店.

金田一京助ほか（編集顧問）(1981)『日本国語大辞典(縮刷版)』第９巻. 小学館.

小泉　保（1995)『言語学とコミュニケーション』大学書林.

尾上圭介（1999)『大阪ことば学』創元社.

大江孝男（1999)『新訂　言語学』(放送大学教材）財団法人　放送大学教育振興会.

彭飛（ポン・フェイ）(1999)『大阪ことばと外国人』中公文庫.

真田信治（編）(1999)『展望　現代の方言』白帝社.

真田信治（2000 a)「変容する大阪ことば」『月刊言語』１月号. 大修館書店.

真田信治（2000 b)『脱・標準語時代』(21 世紀論点シリーズ）小学館文庫.

真田信治（2001)『関西・ことばの動態』(大阪大学新世紀セミナー）大阪大学出版会.

坂梨隆三，月本雅幸『日本語の歴史』(放送大学教材）財団法人　放送大学教育振興会.

佐藤武義（編）(1996)『展望　現代の日本語』白帝社.

田中春美ほか（1978)『言語学のすすめ』大修館書店.

田中春美ほか（1988)『現代言語学辞典』成美堂.

Trask, R. L. (2000) *The Dictionary of Historical and Comparative Linguistics*. Edinburgh University Press.

安井　泉（1992)『音声学』(現代の英語学シリーズ２）開拓社.